

一 神は愛です

ヨハネの手紙 一 四章七節――二十一節

一〇〇八年十一月二十一日礼拝説教 秋吉隆雄 牧師

わたしたちは、二〇〇八年のクリスマス礼拝をこのように迎えました。アメリカのサブプライム・ローン問題に端を発した金融危機は、世界中を襲って、日本においても職を失い、住む所を失う人が出始めています。戦後は右肩上がりの経済でありましたけれども、経験したことのない不景気が襲っています。これから先、どうなっていくのかという不安と恐れでいっぱいあります。その不安と恐れは人の心を荒廃させて、いろいろの事件を生み出していくのでしょうか。今、日本では、皆が暗い気持ちになつて、希望が持てない状況が蔓延しているように思います。そのような中で、神の子イエス・キリストの「降誕を迎えて祝う、神様に感謝する、それはどういうことなのか。心を静めて、聖書の告げるクリスマスの出来事を、ご一緒に考えていただきたいと思います。

今年のクリスマスには、NTさんが洗礼を受けられました。新年に出される『若木』にも書いておられますから申し上げますが、Nさんは八十三歳になられます。信仰は年齢に関係がない。それよりも私は、Nさんの心の若々しさを本当に素晴らしいと思っています。ご自分を厳しく律して、大変謙遜ですけれども、毅然とした生き方をしておられる姿を、本当にすがすがしく思います。ご主人を亡くされた後、暫くして教会に見えるようになりました。礼拝と入門講座は休むことなく出席されて、イエス・キリストを信じる信仰に生きようと決心されました。決心してみると、周りには大勢のクリスチヤンがおられて、備えられた道であつたことを感謝しておられます。

またUYさんが転入会されました。中学生の時に、お母様と一緒に日本同盟基督教団大井教会で洗礼を受けられました。お母さんは、わたしたちの伝道所の発足当初から転入会しておられました。Yさんの弟さんのTさんは、四十八歳の若さで召されました。教会で悲しいお葬式をいたしました。このTさんのご逝去を機にYさんが教会に見え、今日転入会されました。Yさんは、人と時と場所を見る目が確かで、私は本当に仕事ができる人だと思っています。今年のクリスマスは、お二人を迎えることができました。共々に喜びや悲しみを分かち合つて、

これからのお信仰生活を励んでいきたいと思います。

さて、今年のクリスマスに与えられた御言葉は、ヨハネの手紙一、四章七節以降であります。パウロはコリントの信徒への手紙一、十三章で「愛の賛歌」を美しく歌い上げています。今日の御言葉は「愛の神学」と言われ、愛について神学的に論述している力強い御言葉です。「神は愛」とタイトルが付けられています。「神は愛です。」これが今日の御言葉の中心です。人間は愛というものを知らなかつた。愛の神が示されて、愛が何であるかを知らされた。愛とは相手との関わりを求めて動く出来事であります。愛は抽象的な絵に描いた餅ではない、愛は具体的な出来事であります。その出来事の愛を神が発動された。そのことによつて人間は初めて愛というものを知つた。神が発動した具体的な愛とは、独り子イエス・キリストを世に遣わすことありました。御子イエス・キリストのご降誕「クリスマス」、これが神の発動された愛であります。このクリスマスによつてわたしたちは生きるようになされた。その内容はどのようなことであるのか。それは神の子イエス・キリストを世にお遣わしになり、この御子イエス・キリストの十字架によつて罪が償われ、罪なしと神は宣言された。それによつてわたしたちは神と共に生きるようにされた。無罪を保証したイエス・キリストの派遣と十字架に愛がある。あなたがたはこの愛を知り、この愛に包まれている。

四章の七節から十二節までをもう一度ご覧頂きたいと思います。

「愛する者たち、互いに愛し合いましよう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知つてゐるからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によつて、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまつてくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。」

この論理が愛の神学です。七節から十二節までの間に「愛」という言葉が十五回記されています。そのすべてはギリシャ語の「アガペー」という言葉です。アガペーは自己を放棄する、自己犠牲の愛です。神は独り子を世に遣わし十字架で

失う。最愛の独り子を十字架で殺させる自らの痛み、苦しみにおいて人間に関わり、人間を赦し生かす。このアガペーが神の愛である。神様はそのような愛であなたがたを愛している。アガペーの愛で包まれているので互いに愛し合います。神の愛がわたしたちの間でも具体的に実践されるようにと勧めています。神を見た者は一人もいない。けれどもわたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまつて、神の愛がわたしたちの内に全うされている、と言います。

愛の神が発動したイエス・キリストの「降誕・クリスマスと十字架によつて神と共に生きる」という是認宣言がなされた。これが愛である。今日の聖書はそのようにわたしたちに語りかけています。この愛に基づいて互いに愛し合う。神にとどまり、愛を持つて隣人と向き合う。そこにわたしたちの生きる確かさがある、と語っています。

ヨハネ福音書と、ヨハネの手紙一、二、三をヨハネ文書と言います。このヨハネ文書は「とどまる」という言葉が大変好きでしばしば用いています。ヨハネ福音書十五章の九節、十節で、キリストはこう語つておられます。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の捷を守り、その愛にとどまつているように、あなたがたも、わたしの捷を守るなら、わたしの愛にとどまつていることになる。」今日の御言葉の十三節でも、「わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまつてくださることが分かります」。また十五節にも「神がその人の内にとどまつてくださり、その人も神の内にとどまります」と書いて、神と人とがとどまり合うということを力説しています。

ニーチェが神を求めて走つた。そして「ふと振り向くと、何と神様は後ろにいた」と書いています。神様を通り過ぎたというわけでしょう。そうではなくて神にとどまるのです。ヨハネ文書では、信じる、交わる、知る、見る、そしてとどまる。これらはほとんど同じ意味内容です。神と共に神の内にいることを指しています。神が御子イエス・キリストを救い主として遣わされたクリスマスを受け入れた人はイエスを神の子と公に言い表し、これを証します。そして、その人は神のアガペーの愛を知り、信じている。だからその人は神の愛にとどまり続ける、と語っています。

四章十六節の後半の「から」を「覗いただきたい」と思います。「神は愛です。愛

にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまつてくださいます。こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた捷です。」

神は愛です。この神の愛を信じる人は神の愛の内にとどまりますから、神もまたその人の内にとどまつてくださいます。そこで、愛がわたしたちの間で全うされていく。その人は、歴史の終わり、終末の時、神の前で確信を持つて立つことができる。岩波訳の聖書は、「裁きの日に恐れずに発言をすることができる」と訳しています。神様の前で、「わたしはこう生きてきました」と堂々と言える、と訳しています。その次に、「この世でわたしたちもイエスのようであるからです」とあります。イエスのようである。神の愛にとどまる人は、福音書に記されている愛を貫き通されたイエスと同じ者にされていく。小さなキリストになる。わたしたちのこの世での生き方がキリストと同じになる。素晴らしいことですね。小さなキリストになりますから、愛に生きますから、恐れがない。愛は恐れを締め出します。イエス・キリストが生きた日々は苦闘でした。汗と涙と血を流す日々であります。けれども、そこには神に突き抜けた明るき、恐れを知らない解放がありました。愛は恐れを追放する。イエス・キリストの生涯において、最も緊迫したのは受難週の一週間であります。けれども、その受難週のどの一日も恐れはない。激しい論争はありましたけれども恐れはない。「神が共におられる。その神の愛がわたしを包んでいる」という信仰が恐れをなくし、更に、敵対するものをも包み込んでいこうとする愛と平安がはつきりと現されています。アガペーの愛、そのものを生きたから恐れがないのです。

神は愛です。神様からイエス・キリストを通してアガペーの愛を知られ、私たちはこのアガペーで愛されている。私たちが神を愛したのではなくて、神がまづわたしたちを愛してくださった。今わたしたちが神の愛にとどまつて、神を愛そうとするのは、神様がアガペーの愛を発動してわたしたちを包んでくださった

からです。愛は神にあり、すべてがここから出発する。そして、「この神の愛を具体的に生きよ」と著者は勧めています。神を愛していると言ひながら、兄弟を憎む者がいるならば、それは偽り者である。目に見える兄弟を愛せない者がどうして目に見えない神を愛することができましょうか。神を愛する人は、目に見える兄弟を愛します。これが神様から与えられた捷であるというのです。

ヨハネ文書は、神信仰を抽象化し、觀念化していつたグノーシスを強く意識して書いています。神信仰は觀念ではない。具体的に愛の出来事を起こしていくことです。神を愛することと兄弟を愛することは一つのこと、同じことです。愛は動く出来事である。これがヨハネの手紙の「愛の神学」です。

はじめに申しました今の時代の問題について、私はこんなふうに考えています。今回の「百年に一度」という経済不況は、ある人々のお金に対する異常に強く深い執念が、言うならば彼らの過ちが、経済機構を崩壊させていったのだと思います。ですから、この不況には原因と理由があるわけです。そのおかげで全く関係のない人々が切り捨てられ、命を奪われるということも起こってきます。全く理不尽で、やりきれない怒りを覚えます。戦争前、野心を持った政治家や軍人が、日本を戦争へと引き込んでいきました。その彼らの歴史に対する過ちが、二千数百万の命を奪いました。そして、日本は壊滅的に崩壊させられました。ここにも理由と原因があります。人間の歴史は、過ちや罪が起こった場合、それによつて計り知れない苦悩が増幅されていきます。けれどもその苦悩を負う人がいなければ、過ちと罪を乗り越えていけないのです。私は、時代の苦悩を負う人は、いわば罪を償う人々であると思つています。これは実に理不尽ですけれども、この償う人々がいなければ、歴史は前に進んで行けないのです。聖書の信仰は、神の子イエス・キリストは人間の営みの一番下で、今も十字架に架かりながら償い続けてくださっている。イエス・キリストの十字架の償い、これによつて世界は、社会は支えられているという信仰なのです。今の時代、理不尽に投げ出され、苦しんでいる人々はイエス・キリストの贖罪の死につながっている人々ではないかと私は思っています。そのように考える時に、苦しむ人々の苦しみは、時代を救う意味がある。そしてすべての人がこの時代を救う意味を持つ苦しみにつながつていく、そのような生き方が求められていると思ひます。

今年のクリスマスに与えられた御言葉は、愛の神は、愛を発動して御子イエス・キリストを遣わされたクリスマスを人間に与えられた。御子は十字架に架かつて

人間の罪を償い続けてくださっている。あなたがたはその愛の神の支えによって生かされている。だからあなた方も互いに愛し合いなさい。愛は抽象的なものではなくて、具体的に痛み、犠牲を伴う愛である。この愛を生きなさい。そう勧めています。私は、この時代、苦しみを負わされている人々の背後に、イエス・キリストの十字架を見るような気がいたします。ですから、彼らの苦しみは私の問題でもあるわけです。彼らと共に時代の苦しみを担つていこう。そうすることが「神を愛する人は、兄弟をも愛すべきである」という御言葉の意味ではないか。そう思われられます。

今年のクリスマス、わたしたちは愛の神学を示されました。これは難しい神学ではありません。隣人を柔らかな心で、そして体を動かして愛し続けなさい。それが御子イエス・キリストを迎えて、この世でわたしたちがイエスのようになる、小さなキリストになっていく救いである。そのように、今日の御言葉はわたくちに示しています。これを受け入れて、イエス・キリストのご降誕を一緒にお祝いしたいと思います。